

モンゴル通信

NO.12

夏が来た！

「モンゴルは四季があるけど、日本もあるの？」モンゴルの人によく質問されることです。その度に“モンゴルの四季など四季じゃない！”と思ってしまっていました。だって、9月に入ったら何だかもう寒くて、10月には集中暖房が始まって、その後は極寒だったし、集中暖房が終わったのは5月の半ば。ほとんど冬！と思いませんか？

しかし、一年も暮らしてみると、ただ寒いだけじゃない、確かに四季があるわ...と、思えるようになりました。寒い秋。凍てつく冬。砂嵐の春。そして、草木がぶわっと芽吹く夏。5月末、気温が35℃前後の日が続くようになったら、校庭に草が生え始め、枯れ木に葉っぱが！およそハケ月ぶりに見る緑に感動したことをよく覚えています。「夏が来る、夏が来る。」と人々がつぶやきだします。「待ちに待った」という言葉がこれほど相應しいとは！



冬の凍ったヘルレン川



枯れ地に一番に咲く花

6月の一週目が終わると、子どもたちは夏休みに入りました。「夏休みに何するの？」と尋ねると、ほとんどの子どもが「フドゥーに行くよ。」と答えます。“フドゥー”とは直訳すると“田舎”なのですが、多くの場合は“親戚の遊牧民のゲル”を指します。春に生まれた家畜の赤ちゃんが少し大きくなって、最も乳が多く取れる夏の遊牧民の暮らしは大忙し。街で暮らす大人も子どもも“フドゥー”に行き、家畜を追ったり、燃料になる牛糞を集めたり、牛や馬の乳搾りをしたり、乳製品を作ったりと遊牧民の仕事や家事を手伝います。「草の香はいいし、牛糞でおこした火でつくる食事は美味しい。家畜の鳴き声を聴いて、乳を絞って、乳製品を食べて...。“フドゥー”の暮らしはいいよ。」と自慢げに話してくれます。

“夏休みが3ヶ月もあるなんて、休みすぎでしょう！”と聞いていましたが、厳しい冬が長く続くモンゴル。草木が生い茂り、暑くてもカラッと過ごしやすい6月末から7月末までが“夏”、肌寒くなる8月はもう“秋”なんです。短い夏、遊牧民の暮らしを手伝いながらしっかり休んで存分に楽しむことは、モンゴルの人々にとって大切なことだと感じるようになりました。

長い長い夏休み

学校から子どもたちの声が聞こえなくなると、先生たちは教室の修理や整備に取りかかります。学校で予算が取れないため、かかる費用は全て先生の自己負担。6月の二週目までが勤務日と決められ、自分の教室の修理・整備の完了が認められると夏休みに入ることができます。その際、夏休み中のお給料が月の給料の三割ほど出るそうですが、通常の給料は出ないとあって、先生たちも2ヶ月半しっかり休みます。私も壁のペンキ塗りや窓の新聞貼りを手伝い、長い長い夏休みをいただくことになりました！

「モンゴルの夏の一週間は、日本の夏の一ヶ月に相当する。」との先輩の教えに従い、この夏はモンゴル国内を旅して回ることに決めました。まず始めに向かったのは、“ウムヌゴビ”（ウムヌ＝南、ゴビ＝まばらな短い草が生えている土地）。協力隊の仲間10名、モンゴル人の運転手2名の計12名が二台のランドクルーザーに分乗し、10日間の旅が始まりました。



「オボエ」の回りを3回まわりながら、旅の安全を祈ります

旅の始まりにはオボエ

昔、モンゴルの人々は、山や川、天にはそれぞれ神様がいて考えていました。“オボエ”は、石が積まれて山のようになっていて、その土地の守護神が宿る場所とされているものです。山の上や草原、街中、国境付近など場所によってさまざまな種類があります。

モンゴルの人々は旅に出るとき、必ずオボエに寄ります。乳や乳製品、飴などの捧げものをしながら、時計回りに3回まわり、その後の旅の安全を祈ります。

今回、風呂なしトイレなし電気なし電波なしの旅をする中で、自然と密に接し、モンゴルの人々が自然の中に神様がいて考え、今も神様を祀るオボエを大切な存在とするわけがよく分かりました。次回からは、サバイバルなウムヌゴビ旅行の詳細をお伝えします。

(富井愛)